慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	巻頭言
Sub Title	Foreword
Author	荒川, 和晴(Arakawa, Kazuharu)
Publisher	慶應SFC学会
Publication year	2023
Jtitle	Keio SFC journal Vol.22, No.2 (2022.) ,p.6- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 SFCバイオの軌跡
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11671240-00220002--004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

巻頭言

特集　SFC バイオの軌跡

KEIO SFC JOURNAL Vol.22 No.2 特集編集委員

荒川 和晴

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授

SFC バイオは普通じゃない。

生物学なのに生き物そのものを実際に全く扱うことなく、そのデータの解析をするところから始まり、ヒトゲノムが決定される以前から、本来ポスト・ゲノムと呼ばれる領域に属す全細胞シミュレーションをその中心的研究に位置付けた。「SFC のバイオ」だが、学生も教員も、その半数は山形県鶴岡市で、あるいは相互に行き来しながら、教育研究活動に従事している。大学の研究だが、非石油依存素材である人工クモ糸の量産化に成功し日本有数のユニコーン企業に成長した Spiber 社などの「地球を救う」ベンチャー企業を多数輩出し、雇用創出・街づくりなど地方創生の実績でも国内外から注目を集めている。型にはまることなく、実学によって「異端妄想の譏を恐ることなく」未来を先導することの意義を、福澤諭吉は『文明論之概略』の中で「即ち今日の異端妄説も亦必ず後年の通論常談なるべし」と説いた。まさに、次の時代のスタンダードをつくる者は、今の「普通」に収まってはならないのだと思う。

それにしても冨田勝は異端そのものである。

自動翻訳のアルゴリズム研究で人工知能研究者として大成しながら、SFC 就任後軽やかに生物学に転身し、教員の立場でありながら博士課程に入学。2001 年に山形県鶴岡市に先端生命科学研究所が開設されて以降、SFC で環境情報学部長を務めた期間を含め、現在に至るまで所長として「鶴岡の奇跡」とも称される快進撃を続けてきたことは改めてここで述べるまでもなく、さらに本特集の招待論文でも多くの章で触れられている通りである。学位だけ見ても、冨田はその後 4 つ目となる政策・メディア博士を修めたわけだが、

さすがにこのような冨田の軌跡が「後年の通論常談」になるほどには未来は破天荒でないだろう。

SFC のバイオはこれまで常に冨田と共にあったが、間もなく冨田の定年により幕間を迎える。今後も変革を続けながら SFC らしさ・慶應らしさを体現する SFC バイオであり続けるとはいえ、一度これまでの軌跡を振り返り総括し、「地球を救う」ためのビジョンのメジャーバージョンアップを図るには絶好の機会であろう。そこで、本特集では、5 章にわたって総計 21 本の招待論文を掲載する幸運に恵まれた。第 1 章では先端生命科学研究所との縁が深く、さらにそれぞれが冨田同様に生命科学の各分野を切り拓いた世界的パイオニアたちを、第 2 章では SFC バイオを卒業し、世界で活躍する若手研究者たちを、第 3 章では鶴岡での地方創生に関わる方々を、第 4 章では今後の先端生命科学研究所の中心となる若手・中堅研究者たちを、そして第 5 章では、冨田と共に先端生命科学研究所のこれまでの 20 年間を担われた教授陣を、それぞれ著者に迎えた。とりわけ、第 1 章の Bernhard Palsson (UCSD)、Phillip Britz-McKibbin (McMaster U)、Craig Venter (JCVI) らに寄稿いただくことができたのは、ひとえに冨田の人徳があってのことだろう。特集の最後には、先端生命科学研究所と関わりが深く、冨田の良き友人でもある宮田満にコラムを執筆いただいた。招待論文はみな最先端の研究や活動に関する学術論文であるが、そこに込められた思いはいずれもこのコラムに重なるものであると感じている。

先端生命科学研究所が在る山形県庄内地方では、「花よりも根を養う」という考え方が大事にされている。本特集は、まさしく冨田が 30 余年にわたって育んだ根が咲かせた千紫万紅の花束である。この花を愛で、いずれ結ぶであろう果実を想像し、さらに今まさに育まれつつある根に思いを馳せるきっかけになれば幸いである。

雪の降る鶴岡にて

(敬称略)